

「道」に見る日本の文化

白百合学園高等学校 二年 藤川 芽生

八月五日、六年前の今日、私は「道」で奇跡的な出会いをした。

私は夏になると、必ず暑中見舞いを書く。その日も、友人宛ての暑中見舞いを片手に道を歩いていた。ようやく、ポストにたどり着くと手に持っていたはずの葉書がない。どこかで落としてしまったのだ。慌てて来た道に戻るが、家の近所ではなかったこともあり、見知らぬ人が大勢行き交う道で葉書を見つけるのは困難だった。相手の住所が悪用されたらと、不安はどんどん膨らみ、警察にすぐに届け出た私はそこで、悪用の危険性は低いが葉書が戻ってくることはないだろうと告げられた。後悔から立ち直れずにいた翌日、私の家のポストを覗くと、一枚の葉書に目が留まった。私宛て、送り主は吉川さん。聞き覚えのない名前だった。不思議に思いながらも、葉書の内容に目をやる。すると、そこには昨日、道で落ちている葉書を見つけ、すぐに投函して下さったこと、拾った葉書は六枚だが足りない分がないかどうかということ、そして最後に「お元気デネ。」と書かれていた。その時の感動と安堵の気持ちは、今でも忘れることができない。私はすぐにお礼の葉書を送った。

私はつい最近まで、この「落とし物を届ける」という行為は世界に共通することだと思っていた。しかし、海外生活の長い父によると、海外では財布を落としても、携帯を落としても手元に戻ってくることはないという。驚いて調べてみると、実際に「落とし物を届ける」という習慣のある国は、とても少ないということが分かった。遺失物センターの存在が一般的でなかったり、そもそも警察が落とし物を預からなかったりと、理由は様々だ。それと同時に、来日した際、落とし物が手元に戻ったことに驚き、幸せな気持ちになったという外国人の声を多く見つけた。中には、「落とし物」の観点から日本人の誠実さを称賛している海外の記事もある。

日本における落とし物の返還率は、財布類で約六割、携帯類で約八割と高い。私なりにその理由を考えてみた。まず、日本の交番の対応が、相手が子供であっても、届けられたお金の額が小さくても、とても丁寧であることが挙げられる。だから、日本の子供達には、幼い頃から「落とし物を届けるのは良いことだ」という意識が自然と身につくのだと思う。以前祖父からも、小さい頃、五円玉を交番に届けたら、

おまわりさんが「えらいねえ。」と言って折り紙をくれたという話を聞いたことがある。そして、もう一つの理由は「落とし物を届ける」バトンが人から人へ繋がれていくことにある。誰でも一度くらいは、落とし物を届けてもらったという経験があるのでないだろうか。不安が一気に吹き飛び、相手の優しさに包まれる感動は大きい。落とし主の喜ぶ姿が想像できるから、人々は進んで落とし物を届ける。私自身も落とし物が手元に戻ってきた時の喜びを、身をもって実感できたからこそ、吉川さんのような対応ができる人になりたいと思う。そして最後の理由として、思いを全ては言葉にしない日本人のコミュニケーションが挙げられるだろう。私は今までこの空気を読んだコミュニケーションが嫌いだった。直接的な海外のコミュニケーションに比べ、相手に気持ちがはっきりと伝わらず、誤解が生じやすいからだ。しかし、日本の間接的なコミュニケーションの中で培われた、相手を重んじ、状況や気持ちを推し量る力は、確実にこの「落とし物を届ける文化」を支えていると思う。日常的に相手の立場になって考えることを実践しているから、赤の他人である落とし主の気持ちも想像できるのだ。

「落とし物を届ける」ことは、古くから受け継がれてきた日本の「道」特有の文化だ。見知らぬ人が大勢行き交う「道」であっても、見えない人と人とのつながりが日本の「道」にはある。日本人ならではの思いやりを感じることでできるこの文化は、私の誇りだ。

今年の夏に予定されていた東京オリンピック。それに伴い、外国人観光客の増加が予想された。彼らにより良い時間を提供するサービスの一環として、日本では遺失物案内の向上を目指してきた。オリンピックは延期されてしまったが、この文化を世界中に発信する機会があることを願っている。

さて、私の話に戻ろう。吉川さんとのやりとりはその後も続き、葉書での近況報告や、クリスマスプレゼント交換をした。後に、吉川さんは幼稚園の園長先生をしていらっしやる高齢の女性であるということが分かった。世代も、住んでいる場所も、環境も違う私たちが出会えたのは、まぎれもなく、日本の「道」に根付いたこの文化のおかげである。

八月五日、私は毎年この日になると、吉川さんとの奇跡的な出会いを思い出して温かい気持ちになる。